

# 『天津風』のレギオンマスター

光車

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、ブレインバーストの最大勢力レギオンの物語。

# 目次

零話	設定紹介	1
一話	東京に転校!?!?	4
二話	レギオンの最上層部	7

## 零話 設定紹介

俺は神楽坂 天羅。

バーストリンカーだ。

俺は、かなりのバーストリンカーを下に入れていいる。

ざっと三割程。

そして、俺のレギオンを利用しているのも入れると、六割を超える。

俺のレギオンは、『天津風』。

弱小レギオン、ではない。

むしろ強い。

どれくらいかと言うと、他のレギオン、それこそ七大レギオンすらも俺達『天津風』を凌駕する事はできない。

何故なら、俺達は東京以外の殆どを支配しているのだから。

そして、俺達のレギオンが人気な理由。

それは、たとえ自分達の領土で他のレギオンの人がエネミーを狩っていたとしても、何も言わない事だ。

まあ、異世界小説の冒険者ギルドのようなものだ。

B Pでアイテムの売り買いなどはもちろん、貸し借りもしているのだ。

もちろん、銀行のようなものもやっている。

時々持ち逃げもされる

最も、持ち逃げされたら指名手配がかかり、賞金であるB Pにつられてバーストリンカーが血眼になって探すため、そのままなんて事は殆どないが。

ちなみに、時々東京の方へ行った奴が「不便だった」と言うのはほぼお決まりになっている。

それが例え『天津風』ではなくとも言うのだから恐ろしい。

俺達は、岐阜辺りが拠点、もとい本部だ。

そして、各県にいくつか支部がある。

これらはもちろん全て『天津風』の所有物だ。

……B Pはほとんど俺が払っているが。

俺達が東京以外でブレインバーストをやれている理由。それは、たまたま寄った時、ブレインバーストが自動インストールされたからだ。

もちろん、一人ではなく、七人も。

だから、こんなにブレインバーストが広がっているのだ。

……それにしても、恐ろしいな。

何故か沖繩と東京以外の県にも、合計1000人程にブレインバーストが広がっていたのだから。

いつの間にそこまでなった。

つい最近では、いろんな県で、東京と同じ景色が広がり始めた。

もちろん景観ではなく、ブレインバーストのマツチングリストや無制限フィールドのことだが。

さて、俺のレギオンの紹介はしたし、今度は俺のアバターを紹介させてもらいますか。

俺のアバターは、ダーク・モーメントだ。

レベルは8。

安全圏に入れておく事が重要だからだ。

一度はレベル9まで上がったが、ルールを知ってから、セイリユウのレベルドレインで下げた。

以降、戦う方のバーストリンカーならともかく、そうでないバーストリンカーにはレベル9まで上げる事を禁止してある。

アビリティは、《絶対命中》と《断絶》だ。

《絶対命中》は、視界に入っているものに絶対に命中させるアビリティ。

そして、《断絶》は、空間を切る能力だ。

レベル上げは、基本エネミー狩りで手に入れるBPでやる。

新人はPvPで上げるが、そのポイントももつぱらエネミー狩りから来ている。

そして、PvPというのは、一種の娯楽だ。

俺のホームの一つに闘技場みたいなものもある。

そこで、戦ったりしてやっているのだ。

後は、年に数回あるバトルロイヤルとかもある。

参加費は500〜2000BP。

高いが、実際にはこのくらい簡単に手に入るのだ。

一年や二年やれば、大体は10000BPは入手出来る。

例えば、来たばかりの時ならBPなんぞ溜まってないが、普通にやってくれば手に入る。

どうしても参加したいなら、『天津風』で借りればいいし。

尚、BPの譲渡はダイヤモンド・クラフティングのアビリティアイテムクリエイト魔具生成による、BP譲渡機を使用している。使用条件はアビリティ、アイテム両方ともに色々ある。

ちなみに、参加条件は、共通しているのはレベル8以下、という事だ。

レベル9で戦わせると、ポイントが全損してしまうから。

もちろん、殆どのバーストリンカーがレベル8で止めているが。

エネミーバトルロイヤルもある。

通称EBR。

これは、エネミー同士で戦わせ、賭けて遊ぶものだ。

意外にもやれる。

そして大戦争というものもある。

これはPvP。

二組に分かれて戦う戦争だ。

これで無茶苦茶楽しむ奴らが多い。

これに参加するためには保持BP1000越えと言う制限がある上に、レベルも7以上でなければ参加不可。

それもこれも全損を防ぐための処置である。

まあ、みんな楽しんでくれているしいだろう。

ここからは、本編だ。

楽しんでくれ。

## 一話 東京に転校!?!?

俺、神楽坂 天羅は、東京の梅郷中に転校した。

家の仕事の関係で、引越越したんだが、ひとつだけ問題がある。ブレイン・バーストの仲間と合流する事に時間がかかる!

……って、まあそこまで重要なことじゃないんだけど。

実際、ニューロリンカーはあるアプリによつて、直結と同じ事が出来る様になつてるしな。

まあ、それは置いておくとして、俺は梅郷中に転校した。

……東京と言うだけで嫌なのだが。

あつ、でも、帝城には簡単に行けるか。

他にも神獣級エネミーが大量にいるそうだしな。

メリットはあるな。

よし、頑張つて行こう。

\*\*\*

「はじめまして、神楽坂 天羅と言います。これから宜しくお願いします」

学校の自己紹介はこんな感じで済ませるのが無難だろう。

下手な冒険をして、恥を搔くのは馬鹿のやる事だ。しかも、冒険の意味もないところで。

\*\*\*

ふう、終わった。

今、俺は屋上にいる。

ここで、俺はこの学校にいるバーストリンカーを確認する。

「バースト・リンク」

俺はマッチングリストを開く。すると、

Black Lotus Lv9

Silver Crow Lv5

Cyan Pile Lv5

Lime Bell Lv5

と出た。

ブラック・ロータス……？

どっかで聞いたことのある様な……。

……あ。

黒の王だ。

ここ、黒の王の本拠地？

まあいいや。

うん。

どうしよ。

……まあいいや。

……イヤ、よくない。

むしろまずい。

……マジでどうしよう（切実）。

……気分転換に校内ネットに接続しよ。

「バースト・アウト……ダイレクト・リンク」

\*\*\*

ふう、スッキリした〜！

運動系のゲームやって、ストレス発散した。

つたく、どうしよう。

……適当にあいつらに言うか？

「まあいいや。バースト・リンク」

初期加速世界フルワールドに行つて、ブラック・ロータスに対戦を申し込む。

\*\*\*

「……お前か、私に乱入したのは。」

やっと来てくれたか、ブラック・ロータス。

「ああ、そうだ。だが、目的は戦う事ではなく、俺がいる事を知らせる為だ。なんかの拍子で気付かれて、問い詰められたりしたら面倒だからな。ま、俺のリアルネームは神楽坂 天羅。21Cだ。よろしく頼む」

「……は？」

まあ、いきなりそう言われても困るよな。



「俺はお前らと戦う気は一切無いから安心しろ」  
「そうか……。って、おい待て！」

ブラック・ロータスも納得した様だし、自爆！

\*\*\*

これでひとまず安心かな？

いきなり対戦を挑まれる事は無くなった筈。

これでひとまずOK、かな？

## 二話 レギオンの最上層部

とある日の放課後。

俺は早速BB回線を経由したアプリ、アクセルロビーを展開する。そして、天津風最高位プレイヤーのみが使えるコマンドを唱える。

『アクセル・ハイリンク』

\*\*\*

「あ、マスタ―がきたよ〜」

そう言ってくるのは《Hiwa caustive》。

メンバーの中で、唯一自分で戦わない人だ。

戦い方は、神獣級エネミーを使役すると言う異質な方法。

唯一の問題点と言えば、タイムにスペックを出し過ぎて、ステータスが無茶苦茶低い点である。

「さて、では会議を始めましょうか」

仕切るのはこのレギオンの中枢の役割をしている、  
《Diamond Crafting》。

こいつがいなければここまで来ることではできなかった。

実力もさることながら、組織の頭脳としてもとても素晴らしい人だ。

アビリティが強化外装を作成……もといアイテムを作成するの  
に向きすぎている為、基本戦わずにアイテムを作っている。

技術も有り、ハッキングもお手の物。

ちなみにこのアクセルロビーだが、こいつがBBサーバーにハッキングして作った。

「まず、次の大戦争のコストですが……」

「今は予定の3/4は溜まっているわ」

今答えたのは《Carmine spark》。

完全遠距離攻撃型で、この中でも名前だけで簡単に戦法を割り出せるキャラクターだ。

放電による全体攻撃で基本的に戦う人だ。

決してパープル・ソーンと同じような奴ではない。

「3／4ですか。なら足りませぬ。では、次にトーナメント戦の方は……」

「そちらについても問題ない。既にポイントは完全に溜まっている」  
今のは《E<sup>エ</sup>c<sup>ク</sup>r<sup>ル</sup>u<sup>ス</sup> s<sup>パ</sup>p<sup>イ</sup>i<sup>ダー</sup>d<sup>er</sup>》。

この中でとても特殊なキャラクターである。

どこぞの蜘蛛人形みたいなものだ。

中に小さい蜘蛛がおり、それが人形を操っている。

なので、HPが極端に少ない代わりに、ダメージをくらくらくに。

胸にある2cm程の蜘蛛に当てなければいけないのだから。

ちなみに見た目は観戦用アバターと同じだ。

防御は意外と高い。

「そうですか。では、後は……」

「EBRの方のエネミーが減少してきたぞ。そろそろ乱獲しなきやならん」

これは《B<sup>ベ</sup>e<sup>ル</sup>l<sup>ラ</sup>l<sup>ワ</sup>l<sup>アー</sup>l<sup>チャー</sup>l<sup>er</sup>》の発言だ。

圧倒的な精度の弓を使い、戦う。

着弾したら爆発したり貫通したり、何が起こるかわからない超厄介な奴である。

強さは俺に続く2位。

ちなみに俺の《絶<sup>アブソリュート</sup>対<sup>レット</sup>命中》ですら貫通してしまう強さである。

無茶苦茶強い。

アバターの素養では余り強くなさそうなのを、本人のスペックで超底上げしている奴である。

このメンバーだが、全員が神獣級エネミーを複数体相手して倒せる  
と言う化け物揃いだ。

一個下の上層部でも、巨獣級が限界だろう。

同時に相手取るのは。

それだけ実力は乖離している。

神獣級を狩るのは基本俺たちのみ。

他は出来て邪神級。

それも基本レイド組んで残り数人つて所でようやく倒せるだから

ねえ。

「実力差はレベルが幾ら同じであろうと顕著である。」

「そうですか。なら、他には有りませんか？」

「はいはい。支部がやばい事になってます」

「……………は？」